

佐藤 冠次

七十三年前の八月六日、八時十五分。広島
に一発の原子爆弾が投下され、多くの罪の無
い命が失われた。私は、今回の平和記念式
典に参加し、もつと当時の状態を知らなけれ
ばならないと感じた。資料館で見た八時十五
分で止まった時計、血がべつとりとついたワ
ンピース、溶けたガラス瓶や被爆した瓦や三
輪車、原爆ドームを見たとき、そして、被爆
者が実際に書いた被爆体験記、原爆詩の朗読
を聞いた時、被爆直後の状況がどれだけ非情
だったかを知った。家族や友人、子供の死、
やけどに苦しめ、水を求めろくや、今も尚
被爆の後遺症に苦しむ人々。たった一つの原
子爆弾が、たぐさんの物を奪っていった。こ
んな事実を知った時、もし自分の回りに同
じような事が起ったら？と考えるみた。そ
うすると、今のこの日常がどれだけ平和で、
どれだけ幸せな物なんでしょうか。平和
な毎日を生きているだけで幸せなんだと。そ
んな風に思ったからこそ、このような惨劇を

繰り返してはいけないと思った。しかし、世
界にたくさん校があることも知った。そんな
中で私達にできる所はなんだと考えこみる。
それは、被爆者達が訪してくれたように、後
世に語り継ぐことだと思う。被爆者の人数が
少なくなっているからこそ、私達が語り継い
でいなくてはならないと思う。それが、今
の私達に今できる事だと思うが。